

インド留学記

その5

日常の日々



愛知学院大学 教授 岩島

語学コンプレックスから立ち直る方法

ブーナについてから三ヶ月ほど悩まされたのが、語学コンプレックスであった。授業にててもなんのことだか分からぬし、寮に帰つてもまわりの寮生たちと充分コミュニケーションできない状態が続いた。

授業では、サンスクリット（梵語）のテキストが英語に訳され説明されるのであるが、その

英語がよくフォローできなかつた。さらに、サンスクリット語はインドの学生たちにとつては日本での古文のようなもので、彼等は予習もろくすっぽしていないので授業についていふてはるようと思えた。私のように一二、三行読むのに辞書を何度もひかなければならぬのは格段に実力が違つていた。それに度胆を抜かれたのは、もういまどき話す人などいない古典語だと思つていたサンスクリット語で、授業が行われたことだ。先生がサンスクリット語でしゃ

べつているのを、インド人学生たちはサラサラとノートしていた。これを見て、私は絶望的な気持ちにとらわれた。

サンスクリット語の能力について差があるのは仕方がないのだが、英語力にも大差があつたのはショックだった。特にコミュニケーションの手段としての英語力という点では、インド人の学生の中には、小学校から英語で教育の行わる学校に行つていたやつらがいる。その人たちとは、小学校の高学年くらいには英字新聞を読んで、「今日のクリケットの試合の結果は」なんてやつていたのだから、中学から英語を始めた私がかなわないのはしようがない。だが、私と同じように中学校から英語を始めて、大学卒業まで一〇年間学んだだけのインド人にもかなわない。圧倒的にむこうの方がしやべれるのだ。こちらが大平さんのように「アーヴー」と言つてゐるまに、四五倍はしやべりまくられる。

これにはさすがにまいつた。自分の英語力に自信をなくし、どんどん語学コンプレックスに陥つていつた。そして「どうして、私の英語はこうも使いものにならないのだろう」と思い悩むようになつた。そこでこのコンプレックスから立ち直るために、次のようなことを考えて居直ることにした。

(一) インドの英語教育は、日本とは異なり、英語を英語で教えるというダイレクト・メソッド(直接的方針)をとつてゐる。一方、日本の英語教育は、英語を日本語で教えるというインダイレクト・メソッド(間接的方針)をとつてゐる。これが、同じ期間英語教育をうけながら、英語の運用能力の差となつてあらわれてくるのだ。これまで私が英語を習つた先生たちは、果たして自由に英語でしやべつたり書いたりできただろうか。そうは思えない。とすれば、そんな先生から英語を習つた私が英語がしやべれな

いのは当然のことなのだ。

(二) インドは多言語・多民族国家であり、一つの国の中にいろいろな言葉を話す人々が住んでいる。北インドの人と南インドの人が出会つたとき、互いの母国語が異なれば英語でコミュニケーションニケートするということになる。そんなふうにインド人は、英語を日常生活のなかで使う機会が多いのだ。だが、日本では事情は異なる。日本は一応單一言語の国だということになつてゐる。日本人どうしが、方言の違いはあるにしろ、言葉が通じなくて、英語で話す必要に迫られるということなどありえない。従つて、日本人は英語が喋れないのだ。だが、これはこれで、自分の国で外国語を使う必要がないのだから、逆に言えばインドより幸せな状態なのだ。

(三) イスラム圏およびインド圏は、中国文化圏とは異なり、「自己主張の美德」の必要などころである。日常の買い物ひとつとっても、定

価などなく交渉で値段がきまるようなところで、絶えず自己主張していないとだまされて損をしかねない。それにたいして、日本は、「出で釘は打たれる」とか「実るほど頭のたれる稻穂かな」なんて諺があるように、自己主張はあまり評価されない。むしろ伝統的には、「沈黙と譲讓の美德」の文化圏である。従つて、自己主張・自己表現がどうしても下手になる。それが外国语になると、ますます自己主張・自己表現ができなくなるのだ。これは文化の違いであり、私個人の責任ではない。

このように考えて、私はようやく語学コンピュックスから立ち直つたのであつた。三ヶ月かかった。しかし、こう居直つてみると、心理的なコンピュックスがなくなり、不思議と英語が口から出てくるようになつてきた。ようやく、日常生活にも授業にもそう差し障りがなくなつてきたのである。

大学での授業

ピーナ大学で私が所属した「サンスクリット・プラーカリスト語学科」(Department of Sanskrit and Prakrit Language) は、「サンスクリット高等研究所」(Centre of Advanced Study in Sanskrit 略称CASS) も併設されており、サンスクリット文法学の大家ジョン先生(Prof.S.D.Joshi) が学科長と研究所所長を兼任していた。日本の国立大学の講座制度では一つの研究室(すなわち講座)に教授と助教授(あるいは講師)と助手がいるのが普通で、講座はたくさんあるから当然教授もたくさんいるわけだが、ピーナ大学では教授のポストは「サンスクリット・プラーカリスト語学科」と「サンスクリット高等研究所」に各一つで、教授(Professor)といえばそれぞれ学科長、研究所長に相当し、日本の教授に比べると相当権威があるよう

に思えた。そして、このジンシ教授のむかいで五人の助教授(Reader) ～11人の講師(Lecturer) ～11人の研究員(Senior Fellow) ～14人(総勢210人のスタッフがおり、それぞれ研究と教育に従事していた)。

ピーナ大学は大学院大学なので、学生は修士課程と博士課程の学生だけで、学生たちはそれぞれインド各地で学部(いわゆる四年制の大学)を卒業したのちの大学院大学に入学していく。このように様々な地方の学生がおり、印度は、地方によって言葉が異なる多言語国家(たとえばお札にもヒンディー語・マラーティー語・タミル語・ベンガル語・英語などの一五の言葉で10ルピー等の額面が記入されている)なので、母語の異なる者たちからなる学科内の共通語は英語であった。すなわち、授業や会議はすべて英語で行われるのである。これは外国人である私にとっては好都合な状況ではあった

が、一方、日本人同士では日本語があたりまえの国日本から来た私には、「どうしてインド人同士が英語でコミュニケーションしなければいけないんだろう、どうしてインドの言葉たとえば Hindustani 語にしないのだろう」という奇異な感じ

が最後まで抜けなかつた。

博士課程の学生たちはそれぞれの指導教官について博士論文を書くのが仕事なので、授業でいるなどということはない。授業があるのは修士課程の学生だけである。この修士の授業は次の



四つのクラスに分かれていた。(一)梵我一如(大宇宙と小宇宙の同一性)を説いた伝統的なインドの哲学ヴェーダーントを学習するヴェーダーデンタ・クラス、(二)インド最古の宗教文献ヴェーダを学習するヴェーダ・クラス、(三)サンスクリットの文法学を学習するヴヤーカラナ・クラス、(四)インドの論理学を学習するニヤーヤ・クラスである。各クラス二科目からなり一科目は週に二コマ(一コマ五〇分)である。従つて学生たちは、自分が四つのクラスのうちから選んだ一つの主要なクラスから二科目週四コマの授業に出席し、さらに他の三クラスのうちから三科目週六コマ、合計週一〇コマ程度の授業に出席するのである。

私は特別研究生という形で一年間だけの学生だったので、二年間で修了する修士の学位を修得する必要も可能性もなかった。そのため、授業の単位とはとりあえず無関係に、出たい授業

に出ればよかつた。それで、大宇宙と小宇宙の同一性という神秘的な思想にそのころшибいていた私は、ヴェーダーデンタ・クラスにだけ出席することにした。そこで行われていた授業は、『ガウダパーダ頌』(ヴェーダーデンタ学派に属す作品で六四〇～六九〇年ころの人ガウダパーダによって編纂された。仏教の影響が比較的強い作品である)週二時間と『サーンキヤ・タットヴァ・カウムディイー』(純粹精神と物質の二元論を説いたサーンキヤ学派に属す作品で『サーンキヤ頌』にたいするヴァーチャス・パティミシュラ「八九〇～九八四年ころ」の注釈)週二時間であった。両方とも学生がテキストの予習してきて先生に誤りを直してもらうという日本のような演習形式ではなく、先生がテキストを読んで一方的に説明していくという講読形式であつた。そして、その授業の様子はこんな風だつた。

授業風景

日本の大学では一コマが九〇分と長いので、筒井康隆の『文学部唯野教授』の世界のように、先生は一〇分は遅れてくるものと相場が決まつていたが、インドでは一コマが五〇分と短いので、先生はほぼ授業開始のチャイムとともに教室にやつてきた。そしてすぐにテキストを読み始めるのだ。

学生たちは予習などしてきている様子はない。テキストと白紙のノートだけもつてきて、フンフンと言ひながらにかノートをとつている。出席している学生数は一〇人程度で、そのうちの半数以上は女子学生だ。となりの女子学生のノートをこつそりのぞいてみる。先生の説明は英語なので、当然英語でノートをとつていいのかと思ったがそうではない。隣の娘はマハーラーシュトラ州出身なので、母語のマラーティー語でノートをとつていた。僕も日本語でノートをとることにしようかとも思つたが、「英語での授業は英語でノートをとるのが筋だ」と考え直して、あくまで英語にすることにする。しかし、残念ながらまだ英語では授業のスピードについていけない。相当ノートし損なつた箇所が残る。この欠落部を寮に帰つてから再度テキストを読み直しながら埋めていかなければならないのだ。

私のほうは二クラス週四コマの授業にでるだけでもこんなに難行苦行なのに、インド人の学生のほうは、週に五クラス一〇コマ以上の授業をろくに予習復習もせずにこなしていく。一体この差はなんなのだろう。そしてこんなことを考えた。

サンスクリット語（梵語）とインドの現地語（たとえばプーナ市があるマハーラーシュトラ州のマラーティー語）はよく似ている。第一文

字が同じではないか。インド人がサンスクリット語のテキストを読むのは、日本人が『源氏物語』や『枕草子』といった古典を読むようなものなのだろう。たとえ日本人が古文を読むほどインド人にとってサンスクリット語は簡単でないにしても、せいぜい日本人が漢文を読むくらいの困難さしかないのだろう。とすれば、 EINA 大学のサンスクリット学科は日本でいえば国文科あたりに相当するわけだ。そう考へるといろいろ符号するところがある。まず、どうしてこの学科には女子学生が多いのかがよく分かる。日本の国文科と同じなのだ（あえてその理由は述べない）。また、インドにおけるサンスクリット教育のたどつた道は、日本における古文や漢文の教育のたどつた道とよく似ている。第二次世界大戦以前に教育を受けた日本人は、別に夏目漱石や森鷗外にまでさかのぼらなくても、古文や漢文の素養があつた。李白だ杜甫だ

白樂天だとか『古今和歌集』の歌だとか、それなりに身についていた（ようには思える）。そのせいで日本語がうまかった。表現の様々なヴァリエーションを知つていたし、また使うことができた。でも私の世代（戦後世代）はダメだ。言葉はいいたいことを伝えることさえできればいいのだ、それもできるだけ平明な表現で伝えればいいのだという、いわゆる「つづりかた教室」時代の子供たちなのである。だから日本語ができない。このことは、英語の作品やサンスクリット語の作品を翻訳しているときに、しみじみとというかくやしながらというか身にしみる。原語を読んで分かつたことが、日本語にすると言葉足らずでズレてしまうというくやしさを味わうのだ。その原因は戦後の古典・漢文教育の衰退のせいだ、というのが私の見解だが、それと同じことが次に述べるように印度でも起こっていたのである。

（つづく）